



MDP

Sagan

MATCHDAY PROGRAM

7.21 (日)



19:00 KICK OFF

vs サンフレッチェ広島

©1992 SANFRESCCE HIROSHIMA CORPORATION

追

全身全霊。富樫敬真が見せる姿はチームに勇気を与え、サポーターの心を熱く響かせる。昨年30歳を迎えたが、その立場に甘えるような考えは一切ない。「30歳を超えた自分が手際よくやろうとかそういう感じを出してしまうとチームにとってマイナスになってしまう。自分のような年齢の選手が日々の練習からすべてを出し切って取り組むしかないし、それによってチームのペースを高めることができる」。昨年、サガン鳥栖に加わって感じたのは「攻守においてスイッチを入れる役割はこのチームにおいて担っているという感覚」だったと振り返る。ピッチに立てば、攻撃、守備と局面に関わらず、アグレッシブな動きを見せ、チームに勢いを生み出すのが富樫の良さだが、それは試合だけに限らない。日々の練習からも一切の妥協なく、試合さながらの気迫で動く。周囲の選手たちはその姿に感化され、負けじとギアを上げていく。響き合って増幅していく練習でのパッション、そのスイッチを入れるのは富樫であり、地道な積み重ねの中にチームへの貢献を果たしている。

そんな富樫の真骨頂が表れたのが7月初旬、中2日でのアウェイ連戦という厳しい日程で迎えた横浜FM戦と新潟戦だった。先発した柏戦でチームは先制しながら逆転負け。大きなショックを受けた中で迎えた一戦だったが、富樫はただ、ひたすらに走り、走り抜いた。フル出場で勝利に貢献するとそれから3日後のピッチにも先発で立ち、フル出場で連勝を導いた。7日間で約35km走り抜いた男は試合後、脱水症状を起こし、ミックスゾーンに姿を見た際、その足元はふらついていた。柵にもたれかかりながら発した言葉は熱かった。「本当にしんどかったし、動きたくても動けない。でも、動かないといけないからあとはもう気持ちで体を動かした。俺も頑張ってるからみんなも頑張ってる動いてくれて(笑)。最後は気持ちだけでした」。この姿を見て何も感じない人はいないだろう。富樫という男の存在は鳥栖を熱く突き動かしている。

FW 22

富樫 敬真

Cayman TOGASHI

ほとばしるパッション。
チームを、サポーターを
熱く突き動かす
背番号
22

佐賀県 presents

佐賀さいこう! タイ感 DAY